



川崎長太郎 鳳仙花 講談社文芸文庫刊

# 鳳仙花

●川崎長太郎

川上竹七は、五十歳過ぎていた。既に、老衰の徴 歴然たるものあり、眼尻あたりの皺は、ひびのいったような具合であった。体中の毛も、下の方から段々白くなり、てっぺんにまで及んでいる。顔面に、しみがふえ、老眼鏡の厄介にならないと、文字が書けぬ仕儀で、早、歯は抜落ちたもの、残ったもの、丁度半々という勘定であった。

十数年来、物置小屋に、ひとり暮らしていた。小屋も、大正の大震災直後の建物で、屋根のトタン板など、大分錆朽ち、雨もりを如何ともすべなく、吹き降りの日もなれば、小屋の中じゅう、びしょ濡れという有様を呈する。そんな時は、畳の一枚敷いてある場所へ、長々寝ても居られないので、竹七は押入れへもぐり込み、布団や行李の上へ身を横たえ、辛うじて雨を避けるといふ段取になる。又、この頃の暑さでは、日中やけた屋根や、ぐるりのこれもトタン板のほてりが、夜分になっても中々ひかず、小屋の中はムツとする空気で、風でもないことには、どうにもこうにも寝つかれない。かてて、泣きッ面に蜂の、南京虫共が、竹七の血を吸いにくる始末、ここ四五日、彼は小屋の廂先き上げてある、小さな発動機船へ、近所のひと目を憚り、こっそりと布団枕を持ちこみ、煙草、マツチに、夜食の渦巻パンまで用意し、船の上で星空を仰ぎながら眠ることを始めていた。風のない夜でも、外は小屋の中とは、やはり較べものにならないほど涼しい。一挙兩得の、南京虫の襲来する心配もいらぬ。さらさら、聞えてくる波の音や、ちびた蟋蟀の啼き声など耳にしなが、いつか寝入るようであった。

身、老いて、そんな明暮れを繰返す竹七の過去にも、別段光彩放つ、景気のいいことなど、殆んどなかった。胸をたたいて、わが世の春を謳歌したような覚えは、皆無持たないふうであった。一例として、彼が自分の女と、自他に呼べそうな者と、共々暮した経験にしろ、あとにも先きにも一度きりの、それももの一年と続かなかつた。ダンサーしていた、とし上の女との場合は、ひと月そこそこという短日月であったが、時間的にはそう短くない竹七の半生に於いて、銭いらすずで、彼が抱いた女は、この二人である。あとは、どれもこれも、その商売する女達で、彼は比較的におくの方だったらしく、満二十三歳に、童貞を破ったが、手ほどきした女は、東京白山へんの不見転芸者で、相手の処置が気に入らず、その夜のうち別の芸者呼んだりしたが、一度口中に泥を押込められたような不快は、如何ともなし難いようであった。爾後、二十何年経過した今日でも、当夜のことを思い出す度、竹七は皮膚の粟立つような切ない気持ちにひき込まれがちである。そもその、振出しからして、まずかつた。かつて恋を得ず、ずるずるべったりな短期間の同棲生活、その余は売女の腹の上を転々と経てきたような、色や香に乏しい、やせ細った行状も、或は竹七に背負わされた、宿命だったのであろう。既に、今日となつては、その約束ごとにさからい、じたばたしたいにも、余命のほどが、先ず知れていたし、眼をつむって、わがさだめをうけ入れ、そんなに外聞も悪くないよう、又あまりはためいわくもかけないよう、終りを全うしたいというのが、彼の切なる念願らしかつたが、当人の註文通り、果して手際よく行くものか、もとより先きさききことは神様よりご存知ない筈であった。

## 日本文学 あの名場面

文学者の集いである「飯田橋文学会」のメンバー、平野啓一郎さん、田中慎弥さん、阿部公彦さん、ロバート キャンベルさん、中島京子さん、鴻巣友季子さんが神奈川新聞に連載します。

### 人間の業への 温かなまなざし

川崎長太郎は伝説を築いた作家である。生まれは小田原の魚屋。中学中退後、文学を志して上京し、文筆の仕事など請負いつつ小説の執筆をつづけるが、しばしば金に困って故郷に戻る。最終的には東京を引き上げた。

しかし、伝説が始まるのはここからである。小田原に居を定めた長太郎が住んだのは、実家の物置小屋だった。たつた一畳の住まいである。机の代わりにしたのは空き箱。電気も水道もなし。食事は毎日のように同じ食堂でちらし丼。洗面等も外の施設ですませ、夜になると蝋燭の灯りで本を読んだという。

すべてを捨てた生活だ。何もかもまでしなくても、と思う。おそらくこの貧乏暮らしは必然というより、

イデアの世界のもの。こうした生活を送ることで、彼は小説を書くための土台を得た。

今回、引用したのは、彼の評判を高め、世に川崎長太郎ブームを引き起こしたと言われる抹香町(かつての小田原の色町)もの代表作「鳳仙花」の冒頭部分である。金もない。女にも相手にされない。決して豪胆というのでもなく、酒も飲まないし、修羅場もない。ただ裏寂しく、力なく、惨めで陰鬱な老いた男の一人暮らし。

ただ、この自己紹介めいた文章の間隙には、何かチヨロチヨロとしみ出してくる意味のようなものがある。貧乏くさくさして惨めたらしいが、どこかさっぱりしてユーモアもある。失望と哀しさに覆われ高揚や陶酔とは無縁だが、何だか力が抜け意地も張らない。気楽なのだ。

案内人



文学者 阿部 公彦

▲あべ・まさひこ  
1966年生まれ。横浜市戸塚区出身。東京大学文学部教授。英米文学研究と文学一般の評論を行う。主な著書に『英詩のわかり方』『英語文章読本』『小説的思考のススメ』『スローモーション考』『文学をく凝視する』『幼さという戦略』『名作をいじる』など。翻訳に『フランク・オコナー短編集』。

「鳳仙花」に描かれるのは、下級娼婦とのまじわりである。金銭の細かい交渉から、枯れつつある性の現実まで、いかにもちまちましたエピソードばかり。「愛慾」という名の電車を「観に行きたいと言われ、同意すると「ありがとう。うれしいわ。うれしいわ。どこで待ち合わせようかしら」と女ははしゃぐ。しかし、行ってみれば館内は満員。「わたし、立ってることには馴れているから」とのセリフに、立ちん坊で待つ娼婦の哀しさが感じられる。しかも映画の筋はひどく陰鬱で、「みなければよかった」と女は後悔する。

つねに下へ、下へ、と落ちていく展開だ。しかし、落ちていく刹那をとらえる主人公の目が実にやさしい。究極の私小説とも言われる川崎の作品だが、自我の強さのたつたような、あるいは露悪だらけという作品とはちがう。この穏やかな目が、人間の業をうけとめてくれるのだ。

＊次回は7月14日、ロバート キャンベルさん。

## おはようパズル ●—パズル制作：ニコリ

### 数独

今週は数独(すうどく)の登場です。初めての方は例題でコツをつかんでからチャレンジしてみてください。

- ①タテ9列、ヨコ9列のそれぞれに1~9までの数字が1つずつ入ります。
- ②太い線で囲まれた3x3のブロック内にも、1~9までの数字が1つずつ入ります。
- ③タテ列、ヨコ列、3x3のブロック内で、同じ数字が重複して入ることはありません。

◆応募方法—はがき、またはインターネットで。答え、住所、氏名、年齢、職業(学年)、電話番号を明記。応募は1人1回限り(はがきとネットの重複も不可)。

◆賞品—正解者の中から20人に図書カード(千円)、5人にニコリの「難関数独5」一写真一を抽選で。推理する面白さを存分に楽しめる、105問の難問が収録されています。

